

バイロンのセクシュアル・ポリティクス

— 彼のヒーローの女性化について —

門 田 守 奈良教育大学英語教育講座 (英米文学)

Byron's Sexual Politics: On the Feminization of His Heroes

Mamoru KADOTA

(Department of English, Nara University of Education)

Abstract

This essay on George Gordon Byron's sexual politics examines how the poet's sexuality influences plot twists of his poems, where his political stances are thought to be drawn so conspicuously. Byron's political radicalism, however, does not appear without receiving some transformation, which arguably can be ascribed to his bisexuality and also to his wavering political postures. British romantic poets show various signs of their sexuality. William Wordsworth fears to appear as a feminine poet in his attentiveness towards human sentiments and natural scenery. Robert Southey simply looks so happy to draw manly characters who accomplish great achievements with their physical and military power. Walter Scott represents a wavering hero whose life seems to be changed by his connection with female characters. Scott's textual strategy is similar to Byron's in that his hero lives under the strong influence of his female lovers. Scott, however, does not explore in detail his hero's sexuality to the extent that we may sense some political message in connection with the hero's love life. Byron's male characters often become so feminized when they fail in achieving their original political intention, while his female characters take on a kind of masculinity when they try to participate in political activities and actually sometimes succeed in causing upheavals to their society. In dealing with some of the important passages, each fraught with their ambiguous connotations, of *The Giaour*, *The Corsair*, *Don Juan*, *The Island* among others, this essay tries to shed light on the connection of Byron's sexuality and his radical politics.

キーワード：バイロン, 性, 政治, 急進性, ヒーロー

Key Words: Byron, sexuality, politics,
radicalism, hero

1. はじめに

バイロン (George Gordon Byron, 6th Baron Byron) のセクシュアリティに対する態度には、彼の政治性の問題が絡んでいるに違いない。彼の詩におけるヒーローは女性的要素を受け入れることによって、ラディカリズムを獲得することが多いからだ。敢えてヒーローに女性性を帯びさせるという戦略は、バイロンに限られたことではない。たとえば、ウォルター・スコット (Walter Scott) の場合も、『ウエイヴァリー』 (*Waverley*, 1814) のエドワード・ウエイヴァリー (Edward Waverley) は女に

心を惑わされ、運命にも受動的に身を委ねてしまう弱さを帯びたヒーローである。しかしながら、女性性の獲得がラディカリズムと結びつくのは、バイロンに特徴的なことではないであろうか。

セクシュアリティへの態度は、ロマン派詩人の中で大きな振幅を見せる問題である。たとえば、ロマンティシズムとセクシュアリティの研究で知られるクリストファー・ネグル (Christopher C. Nagle) は、その主著の中で、ワーズワス (William Wordsworth) を論じる文脈において次のように言う。

... Sterne's influences is even more pervasive in

matters of pleasure and promiscuity. These concerns produce a twofold dynamic of resistance in Wordsworth's writing: the first, a threat to gender identity and the anxieties faced by a male poet working to establish a niche for original literary production in a field dominated both by women writers and the conventions of affective excess; the second, a threat to the increasingly important boundaries of culturally produced and policed sexual identity, desire, and behavior. Put simply, Sterne's example provides a key to reevaluating the ways in which Wordsworth is affected by writing in an environment thoroughly saturated in Sensibility. [emphasis mine]⁽¹⁾

要するに、ネグルの批評において、ワーズワスは感情に走りすぎ、女性作家たちとの競合の中で、自分の性同一性が不安定な状態に陥ってしまうことへの恐怖を感じている詩人になってしまうのである。

ロマン派詩人のすべてが、ワーズワスのように性同一性への恐怖を感じているわけではない。単純に男性性を表に出すことにこそ意義を見出している詩人もいる。バイロンが酷く憎んだサウジー (Robert Southey) を考えてみればよいであろう。確かに『破壊者サラバ』 (*Thalaba the Destroyer*, 1801) はイスラム教徒サラバが海底の魔術師の館ドムダニエル (Domdaniel) を破壊し、死して後は天上において妻オネイザ (Oneiza) と出会うという男性的アクション中心の詩である。『ロデリック』 (*Roderick*, 1814) は、西ゴート族最後の王ロデリックがスペイン人貴族ジュリアン伯爵 (Count Julian) の娘を犯した罪を悔い改め、王位を従兄弟ペラヨ (Pelayo) に譲りつつ、ムーア人を撃退するという、これも男性的アクション中心の詩である。サウジーは散文の『ネルソン伝』 (*Life of Nelson*, 1813) を書いてしまうほど、単純に男性性を讃美すれば、それでよい作家であった。

ルイス・クロンプトン (Louis Crompton) が詳らかにするように、バイロンはバイセクシュアルであり、バイロンのセクシュアリティに関わる表現はもっと複雑になってくる。⁽²⁾ バイロン詩における男性的パーソナリティの揺れは、たとえば『ドン・ジュアン』 (*Don Juan*, 1819-24) において明確であろう。そのことについて、ロデリック・スピーア (Roderick S. Speer) は「ウェイヴァリー・ノベルズ」 (“The Waverley Novels”) と『ドン・ジュアン』との比較も交えて、このように言っている。

Scott has begun with a character of a 'wavering and unsettled habit of mind.' He has meant 'Waverley' to express Edward's 'wavering' nature; the turning point in Edward's life comes in Fergus's camp where Edward's mind 'wavers' over a critical decision

necessitated by events over which he has no control.
.....

Rhetorically, Juan's function is quite similar to that Scott ascribed to the Waverley Hero. After being sent off from home, he is a foreigner 'to whom everything ... is strange,' allowing the author to go 'into explanations and details,' though to be sure the narrator of *Don Juan* goes far beyond the mere providing of information or even ironic commentary ... Indeed, as Byron says of Juan, 'he had ... the art of living in all climes with ease' (XV.11), and one could conclude that he is 'a reed blown about at the pleasure of every breeze.'⁽³⁾

エドワードは「揺れ動き、落ち着きのない心の習性」を持ち、男性的堅さを前面に出しているとは思えない人物である。『ウェイヴァリー』自体が、彼の揺れ動くことを特徴とする習性を追って進展していく。エドワードの生き方に呼応するかのように、ジュアンは融通無碍に世の中を渡っていく。そのフレキシビリティは「そよ風が吹くがまま揺れる葦」に喩えられるであろう。

この論考では、バイロンのセクシュアリティが彼のポリティクスと結びつくことを議論したい。特に、彼のセクシュアリティに関わる重要な部分が、彼の政治的ラディカリズムの主張に繋がっていることを論じたい。

2. ギリシアは女性として表象される

バイロンのポリティクスの焦点の一つであるギリシアの表象について重要なことは、それが女性としてイメージされることである。たとえば、ウジェーヌ・ドラクロワ (Ferdinand Victor Eugène Delacroix) の『ミソロンギの廢墟に立つギリシア』 (*Greece on the Ruins of Missolonghi*, 1826) とバイロン詩との関係を考察してみよう。

ドラクロワのこの有名な絵画において、ギリシアは女性としてアレゴリカルに表象され、しかも彼女は両腕を広げ、見る者に援助を要請している。女性が立つ場所はバイロンの客死した土地ミソロンギである。ミソロンギとバイロンは、イギリス大衆にとって密接な関係をもって受け取られていた。スティーヴン・ミンタ (Stephen Minta) は、ロンドンの高級紙『タイムズ』 (*The Times*) において、1824年にバイロンがミソロンギに赴くまでは、ただの一度しか言及されていなかったと言う。しかし、バイロンがミソロンギで亡くなった後は、数十回にわたりミソロンギが言及されていると言う。

But the fact remains that, in the *London Times*, there is only one mention of Missolonghi before Byron went there in 1824, while afterwards, and

particularly after his death, the names [sic] recurs dozens of times.⁽⁴⁾

バイロンとドラクロワとの絵画にはさらに深い関係があると、ミンタはドラクロワの研究家の説を引きながら、さらにこう述べている。

From 1885 to 1964, the painting was mistakenly called 'Greece Expiring on the Ruins of Missolonghi' (Johnson, *Paintings* 2.69-71). Johnson notes that it 'has been suggested Delacroix painted this canvas as a memorial to [Byron]', and that the hand which emerges from the ruins in the painting may have been influenced by the dead Selim's hand in *The Bride of Abydos* (2.607-8).⁽⁵⁾

この絵画自体がバイロンの死に捧げられたものであり、右下の石の下に垂れ下がる男の手は『アバイドスの花嫁』(*The Bride of Abydos*, 1813)のセリム(Selim)の手を表したものであるという噂が広まっていた。バイロンの死後の評価であるにしても、彼にとって虐げられたギリシアは女性のイメージで捉えられうる—そのようにイギリスの大衆文化は受け取ったのであった。

3. 植民地は女性として表象される

バイロンのコロニアリズムに関する見解を論じる前に、植民地は一般的に言って、女性として表象される傾向があったことを論じたい。バイロンのコロニアリズムを論じる際の前提となると思われるからである。一つの例として、インドが挙げられるであろう。ムリナリー・シンハ(Mrinalini Sinha)は植民地統治の際に、ベンガル男性が女性として形容された例を挙げている。

The stereotype of the effeminate Bengali *babu* worked precisely by invoking simultaneously the Victorian British gender ideology and the increasingly embattled status of this ideology: on the one hand, therefore, it invoked the logic of a gender system that associated masculinity with maleness and femininity with femaleness and found in them the basis for the 'natural' division of society into male and female spheres; and, on the other, it also invoked the pressures on the classical bourgeois male public sphere from the inclusion of new social actors, like women and the working class. ... the 'unnaturalness' of the demands of 'effeminate *babus*' was parallel to the 'unnaturalness' of British feminist demands.

The stock figure of the 'weak-kneed, effeminate, effete Bengalee' became an important weapon in the colonial arsenal for keeping the competitive

examination in London and hence the covenanted civil service more favourable to the British than the native candidate. [emphasis mine]⁽⁶⁾

“Babu”とは植民地に居住する現地出身の紳士のことをいう。要するに、ベンガル紳士は女性的で政治には適さないで、男性的なイギリス紳士が統治するのが相応しいという主張である。それは当時に、国内の女性の社会進出を抑えつけるロジックにも利用されたのである。統治には相応しからぬ「女性的ベンガル紳士」の要求は不自然なものである。同様に、イギリスのフェミニストの要求も、フェミニストが女性であるがゆえに不自然であると捉えられたのである。

もっと身近な例を考えてみよう。植民地支配が性的寓話として表象された例は、日本植民地時代の台湾をめぐる状況においても示されている。丸川哲史は「戦後台湾アイデンティティと女性の表象」という論考で、植民地化された台湾と帝国主義日本の関係をセクシュアリティの文脈で捉え直している。

丸川によれば、戦後初期において最も有力な雑誌に「台湾文化」というものがあり、その第1巻第2期(1946年11月5日)に楊守愚の「阿榮」という短編小説があった。これは、戦前(1936年)に書かれた「鴛鴦」という短編小説とそっくり同じ内容のものであった。その中で、台湾人の日本統治時代に経験した苦悩が描き出されている。丸川による内容要約と作品評価を下記に挙げる。

主人公の台湾人男性、阿榮は、数年前、砂糖きびを運ぶ車にひかれて左足をなくしている。現在は、妻の鴛鴦が生活のために農場(会社)に働きに出ているが、生活は苦しく、一歳になろうとする子、小毛にミルクも満足に与えてやれない状態である。妻が勤めている農場の主任は日本人だが、その主任の妻(日本人)は子宮の病気で入院している。主任は、自分の妻がいないことをいいことに、鴛鴦に卑猥な言葉でモーションをかけてくる。このことを知り合いから聞いた阿榮は、そのことで気をもんでいる。一方鴛鴦は、主任に対して警戒しながらも、働き口を失うことをおそれ主任の家で夕飯の支度をするのを余儀なくされる。ある日、主任の家で夕飯の支度をし終わった後、鴛鴦は無理やりに主任に酒を飲まされ、そして犯されてしまう。

一晚中帰ってこない鴛鴦の身を心配して待っていた阿榮は、翌朝帰ってきた鴛鴦をその場で問い詰め、彼女から事の次第を聞くことになり、その衝撃のあまり杖を携えて家をでてしまう。そして、精神的混乱の後、我に返った鴛鴦も小毛を連れて家を出てしまう。その後、空になった阿榮の家に、汽車に向かって投身自殺をはかった阿榮の亡骸が帰ってくることになる。

まず、大枠として、作品の体裁そのものはメロドラマでありながら、そこに民族的なモメントが導入され

ていることによってにわかに政治的ニュアンスが浮き出ている。また主人公阿榮が片足である道具立てなど、まさに精神分析における去勢を物語っているともいえる。総じて、日本帝国主義と台湾人との権力関係を性的寓話によって表現したものとみなすことができよう。〔下線筆者〕⁽⁷⁾

この場合、植民地支配の内実が当該植民地の男性性を性的不能状態へと貶めることによって、寓話化されて示されていると言えよう。片足をなくした阿榮は、丸川が言うように、精神分析的に去勢された男であり、したがって妻を寝取られても、自殺するしかない。これはベンガルの男性を女性的地位に貶めることによってインド統治を強化する手法と一致している。要するに、コロニアリズムは植民地化された土地の男性性を奪い取ることによって強化と定着が果たされるのである。

4. バイロンのコロニアリズムをめぐる態度

さて、バイロンはコロニアリズムをめぐる、どのような態度を取ったのであろうか。バイロンのコロニアリズムへの態度は、セクシュアリティとの絡みにおいて、上記の2例と似たような状況で検討される。たとえば、『ジャウア』(*The Giaour*, 1813)の舞台はギリシアであって、支配する男性はトルコ人貴族ハッサン(Hassan)である。ハッサンが生殺与奪の権利を握っている奴隷はリーラ(Leila)といい、チェルケス(Circassia)から連れて来られた女である。ジャウア(邪宗徒)を愛した彼女はモスクから東屋に行き恋人に密会するが、それをヌビア人(Nubians)の召使いに告げ口される。捕らえられたリーラは、袋詰めになれ海の藻屑と消えてしまう。チェルケスはロシア南部、黒海に接するコーカサス(Caucasus)山脈の北西地方であって、厳密な意味でリーラはギリシア人ではない。とはいえ、トルコのギリシア支配はハッサンによるリーラの陵辱という性的な形で示されていることに注目すべきであろう。ここにジャウアは見知らぬ西洋人として、次のように侵入してくる。

Who thundering comes on blackest steed?

With slacken'd bit and hoof of speed,

Beneath the clattering iron's sound

The cavern'd echoes wake around

In lash for lash, and bound for bound;

The foam that streaks the courser's side,

Seems gather'd from the ocean-tide:

Though weary waves are sunk to rest,

There's none within his rider's breast,

And though to-morrow's tempest lower,

'Tis calmer than thy heart, young Giaour!

I know thee not, I loathe thy race,

But in thy lineaments I trace

What time shall strengthen, not efface;

Though bent on earth thine evil eye

As meteor-like thou glidest by,

Right well I view, and deem thee one

Whom Othman's sons should slay or shun.

(*The Giaour* 180-99)⁽⁸⁾

ジャウアはハッサンを殺害するのだけれども、リーラの解放には失敗する。リーラは物言わぬ存在であり、ただ抑圧されているだけの女である。そして、もしもこの物語詩を寓話的に読むことが許されれば、バイロンはセクシュアリティを政治的に利用して、抑圧者から女性として形容された非抑圧者を解放しようとしていると読めるのではないであろうか。

5. バイロンの女性化するヒーロー

ロデリック・ビートン(Roderick Beaton)は、バイロンはジェノア(Genoa)からセファフォニア(Cephalonia)に発つ前の1823年8月の頃、大量のスコットの小説を持参したことを指摘している。また、バイロンのターキッシュ・テールズとスコットの歴史小説の近接性についてもこう言及している。

A perhaps surprising topic of conversation during those days was Sir Walter Scott and 'Waverley' novels. Practically alone among the British literary establishment, [sic] Scott had earned Byron's consistent and ungrudging admiration, ever since the two had met at the home of their publisher, John Murray, in 1815. Scott had confessed to Byron his authorship of the *succès fou* of the previous year, the anonymously published novel *Waverley*. Byron had read almost every one of the series of historical novels that followed. A trunkful of them had travelled with him aboard the *Hercules* and would be remarked on by visitors to his house in Cephalonia in a little later.

Perhaps this was more than nostalgia. The kinship between Scott's romantic historical novels and Byron's 'Turkish tales' has been recognized ever since they first began to be published. Scott's retrospect on the failed rebellion of his countrymen against Hanoverian rule in 1745, in *Waverley*, had not been intended as politically radical—quite the reverse. Nonetheless, the success of *Waverley* and its numerous sequels would lay the foundation for much of what has more recently passed for a national

consciousness, not just of the Scots, but also of the English. [emphasis mine]⁽⁹⁾

確かに、『ウェイヴァリー』の主人公、イギリス人青年士官エドワード・ウェイヴァリーは、伯父の友人ブラッドワーディーン男爵 (the Baron of Bradwardine) のもとを訪れ、彼の娘ローズ (Rose) に慕われる。その後、ハイランドの族長ファーガズ・マッカイヴァー (Fergus Mac-Ivor) のもとで、彼の娘フローラ (Flora) に心を惹かれて長逗留したために、逃亡と反逆の罪を疑われて逮捕される。ハイランダーたちは彼を救出し、チャールズ・エドワード・スチュワード (Charles Edward Stuart) のもとに連れてゆく。ジャコバイトの反乱が起こり、ウェイヴァリーはイギリス軍を相手に戦う。彼はたまたま伯父の友人タルボット大佐 (Colonel Talbot) を助けたことで、反乱が失敗したのち、イギリス軍に許されてローズと結婚する。エドワード・ウェイヴァリーはハイランダーに与した後、イギリス軍に再帰する。恋人もフローラからローズへと元に戻る。エドワード・ウェイヴァリーは、まさに「揺れ動く」(“wavering”) ヒーローである。

パイロンとの関係で考えれば、ジャウアはさほどスコットのではなく、「揺れ動く」ヒーローとは言いがたい。彼はあまりにも謎めいた人物であり、セクシュアリティの点では男性性を貫く人物である。しかしながら、パイロンのヒーロー像は変化し、揺れ動き、女性化への道をたどることさえある。

『海賊』(The Corsair, 1814) においては、『ジャウア』と比べて大いに事情が変わってくる。『ジャウア』のリーラにせよ、『海賊』のガルネア (Gulnare) にせよ、女奴隷であることに間違いはない。だが、リーラが押し黙った奴隷だとすれば、ガルネアは積極的に行動する奴隷である。実際に、彼女はコンラッド (Conrad) に救い出された後に、反乱分子を率いてサイド (Seyd) の部隊を打ちのめす。また、ガルネアが奴隷状態から解放されると、逆にコンラッドが拘束され、奴隷状態に陥る。そういう動きの中で、コンラッドは奇妙なことに女性化されていく。決定的場面は、ガルネアがサイドを殺害して、コンラッドに再会したところである。

They meet—upon her brow—unknown—forgot—
Her hurrying hand had left—’twas but a spot—
Its hue was all he saw—and scarce withstood—
Oh! slight but certain pledge of crime—’tis blood!

10.

He had seen battle—he had brooded lone
O’er promised pangs to sentenced guilt foreshown;
He had been tempted—chastened—and the chain
Yet on his arms might ever there remain;

But ne’er from strife—captivity—remorse—
From all his feelings in their inmost force—
So thrilled—so shuddered every creeping vein,
As now they froze before that purple stain.
That spot of blood, that light but guilty streak,
Had banished all the beauty from her cheek!
Blood he had viewed—could view unmoved—but
then
It flowed in combat, or was shed by men!
[emphasis mine] (The Corsair 3.414-29)

ガルネアが美を失うことは彼女が男性化すること、コンラッドが彼女の額の小さな血痕に怖じ気づくことは彼女が女性化することに対応するのではないであろうか。虐げられた女性が植民地の表象になるとすれば、コンラッドはラディカリズムに身を投じることによって奇妙なことに女性化してしまうのである。ガルネアはサイドを殺害し、その血が彼女の額を汚している。そして、ガルネアがサイドを殺害するがゆえに、コンラッドは一命を取り留める。コンラッドが海賊に相応しい性格を維持していれば、当然やったであろうことを、ガルネアが代わりに行っているという解釈も可能であろう。ガルネアはコンラッドの男性的側面を引き継ぎ、逆にコンラッドは女性化してしまうのである。

6. ドン・ジュアンも女性化する

ヒーローが女性化する典型的例が『ドン・ジュアン』の中にある。しかも、心理的にまでジュアンは女性化してしまうのである。女装させられ、奴隷市場に売りに出されたジュアンは、まさに商品化された女性である。ヒーローは女性として商品化され、サルターナのガルベヤズ (Gulbeyaz) の性の悦びに供する道具にされてしまうのだ。

ガルベヤズに対して、ジュアンは「男」として奉仕するのかもしれない。しかし、立場として彼はあくまで使われ、消費される側にある。しかも、彼はサルタンに奉仕する女奴隷として、女装させられ、女たちと共にハーレムに詰め込まれてしまう。ガルベヤズの前に召還されたジュアンは、次のように叫び立てる。

127

’Thou [Gulbeyaz] ask’st if I can love? be this the
proof
How much I *have* loved—that I love not *thee*!
In this vile garb, the distaff, web, and woof,
Were fitter for me: Love is for the free!
I am not dazzled by this splendid roof,
Whate’er thy power, and great it seems to be;

Heads bow, knees bend, eyes watch around a throne,
And hands obey—our hearts are still our own.

これはガルベヤズの「キリスト教徒よ、お前は愛することができるのか」‘Christian, canst thou love?’ (*Don Juan* 5.116.927) という不躰な問いかけへの返答である。ガルベヤズは「愛する」ということで、男女の精神的関係ではなく、肉体的関係を表しているはずである。これから、彼女はジュアンに愛の営みを教え込んでやろうとしているからだ。これに対して、ジュアンは女奴隷の「汚らしい装束」をさせられはいるが、「私は深く愛したことがあります—あなたを愛してはいない」と言い放つ。彼は「愛は自由人にこそ可能である！」と喝破し、さらに「頭を下げ、膝を折っても…心は自分のものだ」と主張する。

これに対するガルベヤズの反応は以下のようなものである。

134

If I said fire flash'd from Gulbeyaz' eyes,
'T were nothing—for her eyes flash'd always fire;
Or said her cheeks assumed the deepest dyes,
I should but bring disgrace upon the dyer,
So supernatural was her passion's rise;
For ne'er till now she knew a check'd desire:
Even ye who know what a check'd woman is
(Enough, God knows!) would much fall short of this.

135

Her rage was but a minute's, and 'twas well—
A moment's more had slain her; but the while
It lasted 'twas like a short glimpse of hell:
Nought's more sublime than energetic bile,
Though horrible to see yet grand to tell,
Like ocean warring 'gainst a rocky isle;
And the deep passions flashing through her form
Made her a beautiful embodied storm.

136

A vulgar tempest 'twere to a Typhoon
To match a common fury with her rage,
And yet she did not want to reach the moon,
Like moderate Hotspur on the immortal page;
Her anger pitch'd into a lower tune,
Perhaps the fault of her soft sex and age—
Her wish was but to 'kill, kill, kill,' like Lear's,
And then her thirst of blood was quenched in tears.

137

A storm it raged, and like the storm it pass'd,
Pass'd without words—in fact she could not speak;
And then her sex's shame broke in at last,
A sentiment till then in her but weak,
But now it flow'd in natural and fast,
As water through an unexpected leak,
For she felt humbled—and humiliation
Is sometimes good for people in her station.

[emphasis mine] (*Don Juan* 5.127-37)

ジュアンの発言は、ガルベヤズの感情に訴え、彼女をして最初はサルターナとしての怒りに打ち振るわせる。しかし、彼女の怒りは短いもので、ものの1分ほどしか続かない。彼女は涙を流しつつ、自分を落ち着かせる。彼女は口がきけなくなり、弱々しく彼女の心の中に残っていた「女性としての恥の感覚」が、水が流れ込むように込み上げてくる。この感覚は生身の女としての、自然な感情である。いわば、ジュアンはガルベヤズと内面で通じ合う能力を持っているのだ。

ジュアンは男として、女に犯されそうになる。女のガルベヤズは女の服を着せたジュアンを、性の玩具として扱ってやろうと舌なめずりしている。いわば、ガルベヤズは男として、女性化されたジュアンの肉体を蹂躪してやろうとしている。思うに、ジュアンは彼の男性としての自然の性にもかかわらず、「女」奴隷として、すなわち女として抗議の発言をしているのではないであろうか。彼の発言は、女性にしっかりと発言権がありさえすれば、女性こそが口にするような内容ではないであろうか。要するに、身体は権力に応じ従うであろうが、心は許さない、すなわち「あなたを愛していない」と言い放つジュアンの発言は、通常は性的蹂躪の対象となってしまう女奴隷こそが口にすべき主張ではないであろうか。

ジュアンは女奴隷の代弁者として、いわば「女」の身代わりとして発言し、ガルベヤズの心に眠っていた「女」の心を目覚めさせる。つまり、ジュアンは「女」としてガルベヤズと心を通じさせ、彼女の内面を変えてしまう。ヒーローは内面的レベルにまで女性化され、女性と心を通わせるのである。

この後、ジュアンはエカチェリナ (Catherine II) の性奴隷として酷使されるのだから、彼は男であるにもかかわらず、女が体験するような拘束と蹂躪の日々を味わうことになる。ジュアンはエカチェリナの内面を大きく変えているようには見えないが、ガルベヤズには電撃的なショックを与え、女の意識をラディカルに変える働きをするのである。

7. バイロンのイタリア滞在期の悲劇のヒーローも女性化する

男性でありながら、女性的振る舞いをせざるを得ない性的アイデンティティの不安定ぶりは、当然ながら『サーダナパラス』(Sardanapalus, 1821)に見ることができる。女装と享楽を楽しむ王の女性化した性行は当時のメディアにおいても、既に指摘されていた。

All his love is engrossed by MYRRHA, an Ionian slave; his favourite maxim of state is, to drink wine instead of shedding blood. ARBACES, a Mede, availing himself of the effeminate reputation of the emperor, and instigated by the ruthless prognostications of BELESES, a Chaldean soothsayer, aspires to the empire. SALEMENES, brother-in-law to the emperor, discovers the plot, and obtains, with difficulty, power to seize the authors; but, while in the act of overpowering the desperate resistance of ARBACES, the emperor, equally brave and dissolute, interposes his personal authority, and pardons the traitors. They avail themselves his magnanimity to make an attempt upon his life. He fights like a hero, and repels the conspirators. A general engagement soon follows, in which SALEMENES is slain, and SARDANAPALUS forced to retire within his palace. He dismisses his slaves to the action, … [emphasis mine]⁽¹⁰⁾

In a word, the licence which he takes he grants to his subjects, and would have them, with himself, glide on with love and revelry to the tomb. When informed of the plot against him on the score of his effeminate and inactive life, he is as much piqued with the folly of the rebels as with their ingratitude; but preserves frankness and generosity to the last, and even falls a victim to the humane weakness of a dislike to blood and vengeance. [emphasis mine]⁽¹¹⁾

この女性的性格の王が、いざ戦いとなると案外と猛々しいのは、バイロンにおけるセクシュアリティの混乱を表しているのではないであろうか。たとえば、『サーダナパラス』と平行して、『マリーノ・ファリエロ』(Marino Faliero, 1821)におけるドッジ・ファリエロが最初は反乱集団に加わるのを逡巡するが、反乱の失敗後は男らしく処刑の場面に現れる。いわば、最初女性的なのが、後で男性の側面を表しているのである。

男と女の役割変化において、特徴的なのは『フォスカリ父子』(The Two Foscari, 1821)におけるジャコポ・フォスカリ(Jacopo Foscari)の妻マリーナ(Marina)の発言である。

Mar. 'Tis their [the Ten's] duty
To trample on all human feelings, all
Ties which bind man to man, to emulate
The fiends who will one day requite them in
Variety of torturing! ... [emphasis mine]
(The Two Foscari 1. 1. 261-65)

Mar. [abruptly]. Call me not 'child!'
You [the Dodge] soon will have no children
—you deserve none—
You, who can talk thus calmly of a son
In circumstances which would call forth tears
Of blood from Spartans! Though these did not
weep
Their boys who died in battle, it is written
That they beheld them perish piecemeal, nor
Stretch'd forth a hand to save them?
[emphasis mine] (The Two Foscari 2. 1. 70-77)

Mar.
The country is the traitress, which thrusts forth
Her best and bravest from her. Tyranny
Is far the worst of treasons. Dost thou [the
Dodge] deem
None rebels except subjects? The prince who
Neglects or violates his trust is more
A brigand than the robber-chief.
[emphasis mine] (The Two Foscari 2.1.386-91)

ほとんどの人間的情愛や体制批判の台詞は、マリーナの口を通して観客に伝えられる。それに比べて、ドッジであるフランシス・フォスカリ(Francis Foscari)はヴェネスの体制を維持し、いかなる批判も甘んじて受ける覚悟である。彼の息子ジャコポはミラノ公爵(the Duke of Milan)と通じており、ヴェネスに混乱をもたらす可能性のある手紙を持っているのが見つかり、その罪のゆえ拷問を受けている。父は息子を助けず、息子はひたすらに拷問に耐えている。フォスカリ家に恨みを持つ貴族ジェイムズ・ロレダーノ(James Loredano)は、安心してフォスカリ父子を痛めつける。ただ、マリーナだけが何の効果もなく、ヴェネスの体制を批判し続ける。マリーナはラディカリズムと女性人物が結びついた最も顕著な例ではないであろうか。

8. トーキルの女性化のメカニズム

『島』(*The Island*, 1823)のヒーローであるトーキル(Torquil)は最初男性的であったが、詩の後半部の恋人ヌーハ(Neuha)との逃避行の場面では、女性性に転じてしまう。バイロンにおける男性性と女性性は登場人物の行動の側面で簡単に入れ替わってしまう。

バイロンにおいてヒーローが女性化し、女性化することによってこそ、少なくとも比喩的意味において、ヒーローをめぐる社会的に最もラディカルな状態が展開されることになる。興味深いのは『島』におけるエンディング、トーキルがヌーハの洞窟へと誘われる場面である。

Young Neuha plunged into the deep, and he
Followed: her track beneath her native sea
Was as a native's of the element,
So smoothly, bravely, brilliantly she went,
Leaving a streak of light behind her heel,
Which struck and flashed like an amphibious steel.
Closely, and scarcely less expert to trace
The depths where divers hold the pearl in chase,
Torquil, the nursling of the northern seas,
Pursued her liquid steps with heart and ease.
Deep—deeper for an instant Neuha led
The way—then upward soared—and as she spread
Her arms, and flung the foam from off her locks,
Laughed, and the sound was answered by the rocks.
They had gained a central realm of earth again,
But looked for tree, and field, and sky, in vain.

[emphasis mine] (*The Island* 4.6.105-20)

.....
A thousand proas darted o'er the bay,
With sounding shells, and heralded their way;
The Chiefs came down, around the People poured,
And welcom'd Torquil as a son restored;
The women thronged, embracing and embraced
By Neuha, asking where they had been chased,
And how escaped? The tale was told; and then
One acclamation rent the sky again;
And from that hour a new tradition gave
Their sanctuary the name of 'Neuha's Cave.'

[emphasis mine] (*The Island*. 15.405-14)

この場面面白いのは、あくまでヌーハがトーキルを海底の洞窟へと誘う点である。イギリス軍から逃れる際に、ヌーハは自分の知っている洞窟にトーキルを導くが、洞窟に至ったときの彼女はいかにも勝ち誇ったようである。洞窟の閉塞性と子宮空間の相似性は大いに興味深いところであるが、ここが彼女のテリトリーであることは間違いない。

また、さらに面白いのは、この前後でまったくトーキルの反応が窺い知れないことである。彼はまったく口を利かず、嬉しがっているのか、悲しんでいるのかさえわからない。洞窟から出てきたトーキルを迎えるのは千隻もの小舟であり、トゥーボナイ島(Toobonai)の原住民たちは喜んで彼を迎え入れてくれる。彼の仲間のジャック・スカイスクレイプ(Jack Skyscrape)やベン・バンティング(Ben Bunting)、そして勇敢なリーダーのクリスチャン(Fletcher Christian)は皆、死んでしまっている。その他、14名の連中はイギリス軍に捕まえられている。トーキルはイギリスとの縁が切れ、原住民と暮らしていくことになる。殺された、あるいは捕まえられた仲間への罪意識も抱いているであろう。しかし、もっと強く彼の胸中に渦巻いているのは、原始的部族の一員になってしまった隔絶感ではないであろうか。

トーキルがモデルとなっているのは、ジョージ・スチュワート(George Stewart)、すなわちオークニー(Orkneys)諸島出身の良家の息子である。バイロンは彼がヘブリデス(Hebrides)諸島の出身だとしているが、実はオークニー(Orkneys)諸島出身の間違いである。彼のイメージは優しいヌーハのそれとは際立って対照的な、厳しい男のそれである。スチュワートの父方の家系は15世紀まで遡り、母方の家系はメアリー・スチュワートの腹違いの兄弟にまで遡るのである。つまり、スチュワートは由緒正しき血筋の息子であり、彼をモデルとしているトーキルは実に高貴な男らしい人物なのである。そんな彼が原始的な島の一員となることは、ある種の戸惑いを生むことは当然なのではないであろうか。

バイロンが『島』を書いたのは1823年の1月から2月にかけてのことであり、出版は同年6月26日である。この年、2月にバイロンはトレローニ(Trelawny)とブラキエール(Blaquiere)にギリシア行きの意思を伝えている。5月にはギリシア委員会のパウリング(Bowring)から委員に任命され、バイロンは自費での武器弾薬の提供の意思を申し出ている。7月には、バイロンはピエトロ・ガンバ(Pietro Gamba)、トレローニ、ブルーノ医師(Dr Bruno)、フレッチャー(Fletcher)らと共に、ハーキュリーズ(Hercules)号でジェノアを出帆している。『島』の出版は、ギリシア遠征の時期と重なっているのだ。

ということは、トーキルが原始的な島の一員になることと、バイロンがギリシアに身を捧げる行為は重ねて考えられるのではないであろうか。というのは、若干時が下って、同年9月28日の「セファロニア・ジャーナル」(“Journal in Cephalonia”)において、バイロンはこう言っているからである。

When the limbs of the Greeks are little less stiff from the shackles of four centuries—they will not march so much “as if they had gyves on their legs”.

—At present the Chains are broken indeed—
but the links are still clanking—and the Saturnalia
is still too recent to have converted the Slaves into
a sober Citizen.—The worst of them is—that (to
use a coarse but the only expression that will not
fall short of the truth) they are such d——d liars;
—there never was such an incapacity for veracity
shown since Eve lived in Paradise.—One of them
found fault the other day with the English language
—because it had so few shades of a Negative—
whereas a Greek can so modify a No—to a yes—and
vice versa—by carried to any extent and still leave
a loop-hole through which perjury may slip without
being perceived. (“Journal in Cephalonia,” September,
28th. 1823)⁽¹²⁾

ギリシア人はがさつで同化したくない人々であり、
トーキルにとって、まさにトゥーボナイ島の住民に相当
するのではないであろうか。そして、トーキルはまさに
女のセクシュアリティによって、子宮的空間の洞窟を経
て、この島に結びつけられたのである。

キャロライン・フランクリン (Caroline Franklin) は、
洞窟という空間と女性性との結びつきについて、このよ
うに言う。

Zuleika, Haidée, Aholibamah, Anah, and now
Neuha are all associated with caves. An enclosed
space, secluded from the world, it represents wo-
manhood—both her enforced confinement (compare
the bowers of Zuleika and Medora) and her secret
power. ... The cave is the symbol of 'feminine' sen-
timent: a refuge and source of power, hidden from
the view of Northern rationalism. [emphasis mine]⁽¹³⁾

フランクリンが言うように、洞窟が「女性のセンチメ
ントの象徴」であるのならば、それは同様に男性を女性
の立場から感化する場所であったはずである。バイロン
は詩の中で、女性を男性にとって救わねばならない対象
から、救ってくれるエージェントに変え、ラディカルな
主張をするマウスピースに利用し、最終的には男性の運
命を変えてしまう存在にしてしまうのである。

9. 結語

以上見たいずれのバイロンの詩においても、女性のセ
クシュアリティが男性に働きかける作用が扱われている
ことは言うまでもない。女性のセクシュアリティが男性
の行動に影響を与えているのならば、彼の政治性の幾分
かは女性のセクシュアリティの影響を受けていることにな
る。その結果生じてくるのは、彼の政治性の揺れ—
すなわちラディカリズムに偏ることもあれば、彼自体が

女性化の過程を経て、女性にラディカリズムを譲ってし
まうという傾向である。バイロンの中のバイ・セクシュ
アリティがこの傾向に影響を与え、男女間の主張の違い
が、彼の政治性の揺れの原動力の一部となっていること
に間違いはあるまい。

しかしながら、バイロン詩における男女のセクシュア
リティの作用のすべてを、詩人のバイ・セクシュアリティ
に還元してしまうことには無理があるように思う。男性
が女性化し、女性が男性化してしまうことは、政治的文
脈に絡んで起こることがあまりに多いからである。おそ
らく、バイロンにおいて、セクシュアリティはポリティ
クスと緊密に結びついており、ある場合には植民地支配
への非難を表明するレトリックとして利用され、また別
の場合には「自らの」ラディカリズムを隠蔽しつつ、「作
品の」ラディカリズムを標榜するメカニズムを成してい
ると言える。ともあれ、バイロン自身の政治性が揺れて
いることが、彼の詩におけるセクシュアリティとラディ
カリズムの関係に反映されていることは確かであろう。

注

本論考は2017年度日本バイロン協会談話会 (2017年7
月22日、於ステーションホテル小倉) における口頭発表
に加筆・修正を施したものである。

- (1) Christopher C Nagle, *Sexuality and the Culture of Sensibility in the British Romanticism* (New York, Palgrave Macmillan, 2007), 47.
- (2) バイロンのバイセクシュアル的側面については、Louis, Crompton, *Byron and Greek Love: Homophobia in 19th-Century England* (Berkeley: U of California P, 1985) を参照。
- (3) Roderick S. Speer, *Byron and Scott: The Waverley Novels and Historical Engagement* (Cambridge: Cambridge Scholars Publishing, 2009) 62&68を参照。
- (4) Stephen Minta, “The Politics of Altruism” in Roderick Beaton and Christine Kenyan Jones (eds.), *Byron: The Poetry of Politics and the Politics of Poetry* (London: Routledge, 2017), 239-48 [246]を参照。
- (5) Minta, 248を参照。Mintaの指摘するJohnsonの資料はL. Johnson, *The Paintings of Eugène De-lacroix: A Critical Catalogue 1816-1831*, 2vols. (Oxford: Clarendon P, 1981) のことである。
- (6) Mrinalini Sinha, *Colonial Masculinity: The ‘Manly Englishman’ and the ‘Effeminate Bengali’ in the Late Nineteenth Century* (Manchester: Manchester UP, 1995) 35&104を参照。
- (7) 丸川哲史「戦後台湾アイデンティティと女性の表象」、大越愛子/井桁 碧『脱暴力へのマトリックス』, 192-3.
- (8) テキストはGeorge Gordon Byron, *The Complete Poetical Works*, ed. Jerome J. McGann. 7 vols. (Oxford: Clarendon P, 1980-93) による。
- (9) Roderick Beaton, *Byron's War: Romantic Rebellion, Greek Revolution* (Cambridge: Cambridge UP, 2013) 165.

- (10) *The Scots Magazine*, "Lord Byron's Tragedies," Tuesday 1 January 1822.
- (11) *The Examiner*, "Literary Notices," Sunday 23 December 1821.
- (12) George Gordon Byron, *Byron's Letters and Journals*, ed. Leslie A. Marchand, 12 vols. with one supplementary vol. (London: John Murray, 1974-1994), 11: 32-33.
- (13) Caroline Franklin, *Byron's Heroines* (Oxford: Clarendon P, 1992), 92-93.